



知的障害者の生理・病理			単位数	履修方法	配当年次
			2	R	3年以上
科目コード	EE4722	担当教員	金野 公一		

※2019年3月までに単位修得してください（新規履修登録不可）。

※2014年度までの入学者と、2015年度2・3年次編入学者・科目等履修生、2016年度4月生3年次編入学者のみが学習可能です。

■科目の内容

知的障害とはどのような状態をいうのでしょうか？ この科目ではまずはそのことについて学ぶこととなります。アメリカ知的・発達障害学会（AAIDD）の定義ではその内容がかなり具体的に述べられています。そもそも知能とは何か、という考えが様々であることが知的障害の定義を複雑なものにしています。知能検査の数値だけで判断される傾向は今も強くありますが、重要なことはその人が置かれてきた養育、教育環境等によっては数値が低く出てしまうことや、数値では説明できないような能力が実生活の中で発揮されていることも多くあります。また、サポートの在り方によっても本人の状態が変わってくることももしっかり考えるべきだと思います。

何故知的障害という状態が起こってくるのかその原因についても学ぶこととなります。参考書等の出版物やインターネットなどではいろいろな原因を挙げていますが、それらは現在の医学で判明している原因疾患を述べているものです。その数の多さから見ると実際の医療現場でかなりの頻度で明らかにされているような印象を受けますが、実際にはごく一部が解っているだけなのです。全体の7割、8割の原因がはっきりしません。つまり原因不明なのです。健康なご両親から、しかも妊娠・出産、その後の生育経過にも何らの疾患もなく全く原因が不明でも後にその子に知的障害のあることが判明することがしばしばあります。そのことを生理的要因と説明しています。その内容についても良く勉強してみてください。

一方、いわゆる知的障害はないが発達上のアンバランスを指摘される人たちもいます。高機能自閉症や注意欠陥・多動性障害と診断される人たちのことですが、適応がうまくできないということも広い意味では知的な領域で考えることができるので学んでおくべきかと思います。

■到達目標

- 1) 知的障害とはどのような状態を言うのかが説明できる。
- 2) 原因としては不明が圧倒的に多いが現在知られているものにはどのようなものがあるかが説明できる。
- 3) 知的障害への医学的対応について説明できる。

■教科書

黒田吉孝・小松秀茂編『発達障害児の病理と心理（改訂版）』培風館、2005年

■科目評価基準

科目修了試験100%

■在宅学習15のポイント

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
1	知的障害の定義	知的障害はどのように定義されているか、一定した定義はないのでアメリカ知的・発達障害学会などの定義を参考に学んでほしい。	知能指数だけを参考にして定義しているわけではないことに留意してほしい。
2	知的障害の原因	知的障害の原因は不明であることが多いが、現在分かっている範囲での原因について学ぶ。	特に生理的要因と言われるものについては頻度も多いのでしっかり学んでほしい。
3	知的障害の程度と状態	知的障害の程度について軽度から最重度までの状態を把握してほしい。	状態については具体的に学んでほしい。例えば軽度の場合はどのようなことができても何が上手くできないのかなど。
4	知的障害者の能力	知的能力の内容には凹凸があることも学んでほしい。	知的障害のある人でも時には飛びぬけて高い部分もあることにも注目してほしい。
5	自閉症スペクトラム障害について	最近自閉症スペクトラム障害の人たちのことが詳しく分かってきた。知的障害だけとの違いも学んでほしい。	知的障害と自閉症スペクトラム障害両方を併せ持つことがしばしばあることが分かると本人への理解が進む。
6	高機能自閉症スペクトラム障害について	高機能自閉症スペクトラム障害と思われる人たちは知的には正常ということになっているが……。	知能検査では正常であるが、抽象的な問題の理解や深い意味での言語能力に問題がある場合もあり、知能とは何なのかについて深く考えてほしい。
7	人間の知能の本質について	現在何種類かの知能検査の方式があるが、人間の知能というものの本質をどのように考えたらよいのだろうか。	知能についての定義は専門家によっても様々なようである。
8	知的障害が見いだされるきっかけ①	知的障害は何歳頃までに見いだされることが多いのだろうか。そのきっかけは……？	知的障害とは18歳未満までにその状態が明らかになっている場合に限ると言われているので認知症などは入っていない。
9	知的障害が見いだされるきっかけ②	どのような状態・症状があると、知的障害が見いだされるきっかけとなるのだろうか。	知的障害が見いだされるきっかけは乳幼児健診などが多い。
10	知的障害児の学習について	学習が難しいのは小学校の何年生くらいからだろうか。また教科によっても異なるのだろうか。	幼児期で見いだされなくても学齢期になって勉強が難しいなどで発見されることも多い。
11	知的障害児の学校生活について	知的障害のある児童に対応上配慮するとすればどのようなことだろうか。	このような問題は実際の学校現場での様子から知る方が早いかもしれないが、参考文献などでも学べる。

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
12	知的障害児の対応困難事例について	知的障害児の行動上対応困難な事例とはどのようなものがあるのだろうか。	特に自閉症スペクトラム障害が伴う場合などを参考に考えてほしい。
13	障害の自覚について	自分に知的障害のあることをどのようなことをきっかけに意識するようになるのだろうか。	障害の程度によっては自覚の時期やその認識のレベルにも違いが出てくるかもしれない。
14	知的障害と家族支援①	我が子に知的障害があると知った時の両親の思いについても学んでほしい。	家族は何を悩みどのような援助を求めているのだろうか。
15	知的障害と家族支援②	知的障害のある子のきょうだいはどのようにそのことを理解し受け入れていくのだろうか。	このことはあまり問題にされていないかもしれないが、障害のある子にばかりに両親の注目が集まることできょうだいに影響がないのだろうか。

■レポート課題

1 単位め	知的障害とはいかなる状態をいうのでしょうか。
2 単位め	知的障害の原因について述べなさい。

■アドバイス

1 単位め アドバイス

厳密に定義しようと思えばそれなりに文章化もできますが、実際の現場においては行動観察、家族からの聞き取り、知能検査（年齢が小さければ発達検査とも言いますが）などから判断することが一般的です。書籍等の記載では18歳までにその状態が確認されることと述べていることも多いのですが、何らかの原因で成育の途中で知的障害の状態になることももちろんありますが、多くは幼児期において公的機関の健診や家族自身が発達の異常に気づいて医療機関や相談機関を訪れるということが圧倒的に多いのです。

幼児期において知的障害のあることが判明すれば医学的には、「精神発達遅滞」という言葉を使います。学齢に達しても遅れの状態がはっきりしていれば、発達という言葉は取り除かれて「精神遅滞」と言われることとなります。知的障害という言葉は医学では使いません。

つまり「診断」という行為では、遅れの有無と発達上の特徴の両面から診ているということです。「知能とは何か」という定義は、その領域の専門家の数ほどあるとも言われていて、人によってそれぞれに定義の仕方が異なるとも言われていますが、一応は文章化されています。インターネット上でもいろいろな情報を得ることができますので十分な解釈を行った上で自分なりの創意工夫された表現を試みていただきたいと思います。それによってはレポート採点の評価が高まることがあります。

2 単位め アドバイス

実際の現場ではすべての知的障害の原因が判明するわけではありません。むしろ圧倒的に不明なことが多いのです。

遺伝的な疾患の有無や妊娠中の状態、周産期のトラブル、生後の脳障害が関与すると推測

される疾患などさまざまな観点から調べても原因を特定することができないことが、圧倒的に多いのです。したがって、書籍等に記載されている原因と称されているものは、一部の特定されたものについて述べているにすぎないと思ってください。私自身の臨床経験から言っても全体の80%は原因不明に入るのではないかと考えています。

それでも原因を知ることが大事なことです。医療現場では今の医学で治療可能なものが見出されるかどうかに関心を持っています。一部の代謝異常症やホルモン分泌異常症などは早期発見・早期治療によって知的な障害を未然に防ぐことができるのですから。それほど遠くはない将来においては遺伝子治療、胎児治療などで知的な障害を防ぐことができるようになるものと思います。

レポートでは現在判明している原因をそれぞれ記載することでよいわけですが、それは全体から見てのほんの一部でしかないことを念頭において欲しいと思います。しかも予防や治療もできないことも多いということも事実なのです。ただ診断がつくだけ、という悲しい現実が今でも厳然としてあるという事実を再認識していただくだけになってしまいますが……。

■科目修了試験 評価基準

知的障害の定義をしっかりと把握してほしい。知能検査だけで判断しているのではなく様々な分野の能力を総合的にみている点なども。

参考書の文章をそのまま書き写すのではなく、いかに自分の言葉で表現しているかを評価する。記述はできる限り具体的であることなども評価の基準にする。

■参考図書

知的障害だけに関して定義したり原因を述べたりする書籍は少ないと思います。むしろインターネットなどから情報を引き出す方が早いと思います。